

車を買って替えるの記

志村 良知

少なからぬ同世代の仲間が免許返納の話をしている。そんなに急いで老け込まなくても良いのにと思いつつ我が事も考える。六十年近く運転してきたんだ、まあもう少し運転してみるか、そうするには安全運転支援は何も無し今の車では心許ない。

買い替えるには先立つものが必要。そうだ、株だ。社員持株会を退職まで続けた。いろいろあって高値帯で売り損ない、悔しがつている間にも株価はどんどん下がり、退職後ずっと紙屑レベルの底値から動かなかった。それが数年前からじりじり上がり、受け取った配当金のことを考えれば大損でもないか、というような水準に戻った。あれを車に替えよう。

家内も運転を続けるなら安全側への買い替えだね、と大賛成。車種は世界で一番安全そうなT社のL(個人の感想です)に決めた。善は急げ、すぐ電話して予約を取り、十三年物のH社FでT社L販売店に二人で正面から乗り込んだ。

担当はR君という若者。速攻でグレードは、色は、安全運転支援は全部付けて、オプションはそれ付けて、それは要らない、などどんどん決めていく。一見でこんな客は珍しいらしく、R君が段々落ち着かなくなり、保険の説明辺りで「一寸、失礼します」と中座、営業所長を連れてきた。所長はベテランの目で当方を探りつつR君とのこれまでのやり取りを復習してくる。どうやら冷やかしではなさそう、と思ってくれたのか、適当なところで引き下がり、残ったR君と契約をまとめる。「全額現金で払うけど、発注時の前金は百万くらいでいい? (……気持ち良い)」。

納車は四か月後だった。所長と女子社員が花束とキーを渡すセレモニーがあるというが、それはやめてもらう。受け取った車が満タンだったのは流石Lと思った。

さて、我が愛車となったし、ハイブリッドであらゆるものが新しく、戸惑うが楽しい。運転のアシストも車内アメニティもお節介なくらい。これを慎重に運転していれば大きな間違いはあるまい、と思う。